介護労働における新規参者の就労動機についての一考察

－介護職員初任者研修受講生に対するアンケート調査から－

京都府立大学大学院　　坪井　良史（8618）

キーワード３つ：介護労働、介護職員初任者研修、就労動機

１．研 究 目 的

本研究では、新たに介護職に参入する人々はどのような就労動機（内発的動機および外発的動機）を有しているのかについて明らかにすることを目的とする。従来、介護労働においてはワーカーのやりがいや社会貢献などの内発的動機が重視され、また、政策側もそのような動機を政策に反映させてきたといえる（England 2005）。しかし、近年では介護保険制度創設をきっかけとして、介護労働に市場原理が（一部）導入され、サービス提供においては合理性や効率性の追求が求められている。このような中において、従事者の就労動機は、従来のやりがいや社会貢献を重視するものから経済的な動機の重視へと変容していることが考えられる（Le Grand 2003=2008）。

２．研究の視点および方法

本研究では、介護労働に新規参入する人々は（内発的動機よりも）外発的動機を重視するのではないかという仮説を設定する。また本研究では、介初任者研修を受講する受講生に対してアンケート調査を実施する。主たる質問項目は受講目的と就労動機である。そして、これらの質問項目と受講生の属性との関連についてみるためにクロス集計を行うとともにカイ二乗検定・残差分析を行う。

本研究では介護職員初任者研修に着目する。その理由は、当該研修は介護労働における新規参入の主流な入り口と位置づけられるといえること、また、当該研修における受講状況については把握がなされていないことである（労働政策研究・研修機構 2014）。

本研究では、新規参入として（1）民間企業などからの転職、(2）介護職から介護職への転職（再就職）、(3）新卒での入職、(4）定年退職後の社会貢献・社会参加の 4 つのケースを想定している。なお、すでに介護事業所等で従事しながらスキルアップのために研修（実務者研修）を受講している人を対象外とする。

３．倫理的配慮

調査対象事業所に対し、研究協力依頼書を用い、研究の目的・内容を説明し了解を得た。なお、本調査は所属する機関の研究倫理審査委員会の審査・承認を得た上で実施している。

４．研 究 結 果

1）受講生の基本属性

（1）性別をみると、女性が 74。4％と多くを占めた。(2）年齢をみると、10 代が 32.2％、40 代が 19.3％とその多くを占めた。(3）婚姻の別をみると、未婚が 65.7％と、また、(4）生計維持者の別では、生計維持者が他にいる場合が 73.4％と多くを占めた。(5）前職の収

入（年収）をみると、前職に就いていないが 38.4%、100 万円台が 24.9%とその多くを占めた。(6) 前職の雇用形態をみると、正規職が 29.4%、その他が 27.3%を占めた。「その他」の中には、高校生をはじめとする学生が含まれていることが考えられる。(7)「今後（介護福祉士などの）上級資格を目指すか」という問いについては、「考えている」が 57.2%と多くを占めた。

一方、受講目的についての質問では、「これまで民間企業で従事したが、今後介護職に転職するため」が 20.9%、「これまで介護職に従事したが、今後転職あるいは資格取得を目指すため」が 14.4%、「これまで社会経験がなく、今後新たに介護職につくため」が 24.0%、「定年退職したが、今後も社会貢献をしたいため」が 4.7%、「今後働く予定はないが、とりあえず受講した」が 17.6%、「その他」が 14.1%となった。

2）内発的動機と外発的動機のどちらを重視するのか

まず、単純集計結果についてみると、「やりがいを重視する」が 14.4%、「どちらかといえばやりがいを重視する」が 23.1%、「どちらともいえない」が 26.4%、「どちらかといえば生計維持を重視する」が 22.4%、「生計維持を重視する」が 12.0%となった。

3）カイ二乗検定および残差分析結果

就労動機と基本属性との分析からは、(1) 受講生の性別、(2) 年齢、(3) 希望する雇用形態の 3 つの項目について統計的に有意な結果が得られた。(1) では、男性はやりがいを重視する傾向がある一方、女性はやりがいを重視しない傾向がみられた（$p<0.05$）。(2) では、10～20 代の受講生は、どちらかといえばやりがいを重視しない傾向にあること（$p<0.01$）、また、30～40 代の受講生はやりがいを重視しない傾向にあること（$p<0.05$）、さらに、50 代の受講生はどちらかといえばやりがいを重視する（$p<0.01$）一方、生計維持を重視しない傾向もみられた（$p<0.05$）。(3) では、研修終了後、正規職を希望する受講生は生計維持を重視する一方、非正規職を希望する受講生はどちらかといえばやりがいを重視する傾向がみられた（$p<0.01$）。

就労動機と受講目的との分析からは有意な結果は得られなかった。しかし、10%水準ではあるが、定年退職後の社会貢献をきっかけとして介護労働に従事することを希望する受講生はやりがいを重視するという弱い傾向がみられた。同様に、民間企業などからの転職のケースでは、外発的動機を重視する弱い傾向もみることができる。

5. 考察

本結果では、受講生の就労動機は内発的と外発的の双方の動機が混在している状況にあり、本仮説を証明する結果には至らなかった。しかし一方で、外発的動機を重視するグループの存在も指摘される。本結果からは、介護労働を取り巻く環境の変化により、従来介護人材確保において想定されていたような従事者の動機づけは変容している可能性が考えられる。

本研究は「公益財団法人倶進会 2017 年度一般助成」を受けて実施したものである。